Osaka University Knowledge Archive

Title	「日本的」美的概念の成立（二）：茶道はいつから「わび」「さび」になったのか？
Author(s)	岩井, 茂樹
Citation	日本研究. 2006, 33, p. 29-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23284
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

「日本的」美的概念の成立(二)

——茶道はいつから「わび」「さび」になったのか?

岩井茂樹

はじめに

「わび」、「さび」という言葉を聞いて何を想起するだろうか。おそらくは、「日本美を代表する言葉」と答える人が多いだろう。しかし、「わび」、「さび」が最も発揮されているものは何かと問えばどうだろう。多くの人が「茶道」(「茶の湯」とも言うが、本論考では「茶道」で統一する)と答えるに違いない。それほど、現代人には〈茶道=「わび」「さび」〉という図式がこびりついている。そして、そのイメージはといえば、枯淡な、派手でないもののようである。たしかに、「わび茶」という言葉は、江戸時代から現在まで途絶えず存在するから「わび茶」とは何かを考えることは重要なことであろう。

だが、少し立ち止まって考えてほしい。茶道の美的概念とされる「わび」や「さび」の解明は、茶道にとってそれほど重要なのだろうか。よしやそれが現在の茶道にとって大事な概念であるとしても、はたしてそれは通史的にも言えるものなのだろうか。つまり、茶道の本旨、もしくは美的概念を表現する言葉として、現在では必ずといっていいほど使用される「わび」「さび」という言葉が、茶道史上常に使用されてきたのか、ということを筆者は問いたいのである。一体、いつから「わび」、「さび」という概念が茶道で重んじられるようになったのか、そこにはどのような意思や時代の力学が働いていたのかを本論考で明らかにしようと思う。

1 「わび」、「さび」と、茶道の根本理念について

「わび」、「さび」という語についての論考は数多くある。今、それらを逐一紹介する暇はないから、ここではそれらの意味変遷を必要

最小限の範囲で紹介するに留める。その後で、現在の茶道界で「わび」、「さび」という概念がどのように考えられているのかという確認を行ない、茶道の根本理念を表現する言葉が、どのように変遷してきたかを明らかにしようと思う。

（1） 従来の研究における「わび」「さび」

「わび」は、動詞「わぶ」の連用形の名詞化されたものである。本来、不如意を悲しんで思いわずらうことを意味する。つまり元来は否定的な価値を持つ言葉であった。例えば、『小倉百人一首』（成立年不詳）にある元良親王（八九〇～九四三）の歌、「わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむとぞ思ふ」などはその例である。ところが、中世になるとそこに積極的な美が見出されるようになった。その後、『山家集』（成立年不詳）冬部に「ねざめする人の心をわびしめて時雨るゝ音は悲しかりけり」、『徒然草』（元弘元年〈一三三一〉頃成立）七五段に「つれづれわぶる人の心はいかならん、まぎるゝかたなく、ひとりあるのみこそよけれ」とあり、「わび」という言葉が次第に心に沁みる風雅な情感を表す言葉として認識されるようになった。これらは原義の上にわずかに付加された美であり、情感である。

『原色茶道大辞典』は、「室町時代はいよいよ美を否定することによって内面化・精神化する方面に向かって進」み、「一休宗純の淡飯粗茶、心敬の冷え枯れた幽玄美を学んで、珠光は侘びとしての茶湯を唱えた」とする。そして、「武野紹鷗が『浦の苫屋』の歌によって侘び茶の本質を説き、『茶話指月集』には利休の言葉として『数寄道の本意侘びたるにありと覚悟いたし』をあげている。かくして紹鷗・利休によって侘びは茶湯の根本精神となった」。そして、茶道における「わび」とは、「華美を避け、ぜいたくを許さず、もっぱら物質的な享楽に流れるのをやめて、ひたすらに持たざる乏しさ・慎ましさに精神の清純さを尊重するにあった」という。[1]『角川茶道大事典』では、「武野紹鷗に至って、『わび』が茶道の中心理念となり」、その「わび」とは「隠者の生活の中から見いだされてきた自然質朴な美をもととし、更に茶道の展開とともに確立された美意識」であるとしている。[2]

これらの事例から、現在の茶道史研究において「わび」は、武野紹鷗（一五〇二～一五五五）によって茶道の中心理念となり、その意味するところは、おおよそ「質素な生活を肯定的に受け入れ、それに徹するところから生じる閑寂素朴な趣」を言うのであるといえよう。

一方、「さび」はどうだろう。「わび」という言葉と同様、「さび」も動詞「さぶ」の連用形が名詞化されたものである。「わぶ」が元来、人が困苦窮乏するようなマイナスイメージの強い言葉であったのと同様、「さぶ」も孤独な状態をさびしく思うという否定的なイ

メージを伴った言葉であった。それが、藤原俊成（一一一四～一二〇四）・定家（一一六二～一二四一）などが歌合の判詞で肯定的に使用した頃から、次第に肯定的な意味へと変化していった。復本一郎（一九四三～）などは、俊成を「『さび』の美の発見者」と呼んでいる。[3] 俊成が初めて「さび」という評語を用いたのは、嘉応二年（一一七〇）『住吉社歌合』であった。平経盛（一一二四～一一八五）の歌「住吉の松吹く風の音たえてうらさびしくもすめる月かな」に対する評語に、「すがた、言葉いひしりて、さびてこそ見え侍れ」とあるのがそれに該当する。そうした「さび」にある種の趣を見出し、それを積極的に用いたのが、連歌であり、また蕉門俳諧の世界であった。茶道の世界でも、和歌や連歌などに影響された結果であろうか、「さび」というものに肯定的な価値が与えられた。

だが、『角川古語大辞典』には「名詞として用いられたのは蕉風俳論において」と指摘されているように、[4] 蕉風俳諧が興った一七世紀後半までは、もっぱら動詞・形容詞などの形で用いられていたことも知っておく必要があるだろう。「さび」という言葉が名詞の形で、ある種の美や様式を表すようになるのは、江戸時代中期に入るころであったのである。

このような歴史的変遷をとげてきた「さび」という言葉は、現在の茶道界ではどのような説明がなされているのだろうか。『原色茶道大辞典』には「古びて味わいのあることをいう」[5]とあり、『角川茶道大事典』には、「閑寂で、寂しさの中から見いだされた美」[6]とある。さらに『原色茶道大辞典』は、「さび」を「茶湯の精神の根本」ともしており、「侘びもまた茶湯の根本であり、両者は混同されやすい」としている。[7]

これまでに見てきたように、現在は「わび」、「さび」が茶道の根本精神であり、その意味するところも「閑寂な落ちついた美」であるという点で共通している。ただし、「わび」が「質素な生活に徹する」という生活スタイルを茶人に要求するのに対し、「さび」は自然発生的に生まれた、あるいはすでにそこに備わっている既存の美を茶人が「見いだす」という行為と高い審美眼を要求するという点が、両者の最大の相違点であると思われる。侘び茶人、久保権大輔（一五七一～一六四〇）の『長闇堂記』（寛永一七年〈一六四〇〉奥書）にある「侘は万事にその心なくてハあるへからす、よの常の茶湯にほこる人ハ、かやうの心持、胸におちかたき物也」という記述が、「わび」に対する心構えをもっともよく表現しえているのではないだろうか。[8]

（2）茶道の根本理念とは何か？

いま見てきたように、現在の茶道界においては、「わび」、「さび」というのが、茶道の根本理念（本旨）の一つであるという理解が一般的であると思われるし、またそのような前提に立って論じられた

ものも多い。だが、その前提は歴史的に正しいのであろうか。ここでは出来る限り多くの茶書を用いながら、この点について検証する。

表1は、茶道の根本理念がどういう言葉で表現されているかを一覧表にしたものである。とり上げた茶書は、茶道の根本理念と思われる記述があるものに限定した。「わび」、「さび」、「和敬清寂」、「茶禅一味」、「簡素・質素・質朴」のいずれが茶道の根本理念、真髄あるいは美的理念として書かれているかを、表に示した。該当する単語があり重視されているものを○で、表現が似ており極めて近い意味と考えられるものを△、表現がなく、重視されていないものを×として示した。成立年代が明らかなものを一〇〇点、不明なものではあるが茶道において重視されている茶書四点を選び、内容を探った。その結果、次のようなことが明らかになった。

①元禄頃の茶書には「わび」、「さび」という言葉を用いて、茶道の根本理念を説いたものが多い（『南方録』、『茶話指月集』、『源流茶話』など）。この時期は、新興の町人階級が台頭し、風紀が乱れがちであったのと、元禄三年（一六九〇）が利休百回忌に当たり、利休回帰の気風が高まったことから「わび」や「さび」といった精神性を伴った言葉が茶書に多く用いられたものと考えられる。

②江戸中期以降、明治・大正期を通じて「わび」、「さび」を茶道の根本理念として重視する茶書は非常に少ない。

③明治期には、茶道の「簡素・質素・質朴」な点を説くものが多い。礼儀を重視するものも少なくない。ただし、本の「遊び紙」や「扉」の部分に「和敬清寂」という文字が書かれているものは多く存在する。

④大正以降、ほとんどの茶書で「和敬清寂」が根本理念であるとする記述がなされている。

⑤昭和になると、「わび」、「さび」が重要な根本、美的理念として語られるようになる。

以上のことから、「わび」、「さび」が、茶道の始原から常に根本理念、あるいは美的理念を説明する言葉として用いられてきたわけではないことが明らかになった。とりわけ、明治以降、大正時代までは、「わび」、「さび」という言葉は、茶道の中心理念を表現する言葉としてほとんど用いられていなかったこともわかった。

明治には「簡素・質素・質朴」、そして大正期は「和敬清寂」という言葉で茶道の根本理念が語られていたのである。

例えば、明治二六年（一八九三）に発行された堀内正路（生没年不詳）の『千家正流茶の湯客の心得』という本には、次のようにある。

朋友ノ交誼ヲ親密ナラシメ起居礼ヲ失ハズ談話節ヲ紊サズ質素ヲ旨トシ驕奢ヲ戒シメ飲食モ亦度ニ適シテ主賓倶ニ清雅ノ楽ミ

表1　茶道の根本、美的理念について

書名	著者・編者	成立・発行年月	わび	さび	和敬清寂	茶禅一味	簡易・質素・質朴	その他	備考
宗春翁茶湯聞書	針屋宗春	慶長5(1600)奥書	×	×	×	×	×	作意	
僊林	不明	慶長17(1612)年紀	×	×	×	×	×	三綱五常・潔塵・忘貴謙富	
江岑夏書	江岑宗左	寛文2(1662)～3	×	○	×	×	×		茶之湯根本、さひたを本ニして致候、とある（3/5/23条）
熊田与玄茶書	熊田与玄	寛文8(1668)奥書	×	×	×	×	×	風流	貴賤の隔てなく風流を専らとすることは後の世まで如此
南方録	立花実山	元禄3（1690）	○	×	×	×	×		佗の本意は清浄無垢の仏世界を表して云々の文言あり
茶話指月集	久須見疎庵	元禄10(1697)序	○	×	×	×	×		利休が「数寄道の本意、佗びたるにあり」とした逸話あり
源流茶話	藪内竹心	元禄14(1701)以降	○	○	×	×	○	正直清浄礼和質朴	珠光：清浄礼和→利休：清浄正直・礼和質朴、利休は茶湯の風情は佗たるにありと覚悟した、という
石州三百条	片桐石州	元禄年間か	○	○	×	×	×	教外別伝・仏道歌道兼	茶湯さびたるはよし、茶湯は根本佗の体、といった文言あり
貞要集	松本見休	宝永7(1710)奥書	×	×	×	×	×	人を敬いもてなす実	元禄頃の成立か
珠光茶祖伝	大心義統	正徳5(1715)	×	×	○	×	×	礼	珠光・紹鷗・利休らは皆和敬清寂の道を伝えた
茶道五度之書	清水柳渓	明和7(1770)	○	○	×	×	×	隠者の賞翫・隠逸の本意	さびのわびのとよしなき事に心をつくし、という文言あり
贅言	松平不昧	明和7(1770)	○	×	×	×	×	清浄潔白・知足	茶の本意は知足を本とする
茶道早合点	珍阿	明和8(1771)	×	×	×	×	×	礼	事を略するのを佗るといい、佗とは貧乏人という心
不白筆記	川上不白	天明3(1783)	×	×	×	×	×	道心礼儀・衆生一所・六根清浄	佗の説明あり、古今の比較
茶道論	河田直道	天明6(1786)刊	×	×	×	×	○	君臣朋友の交・朴質	
茶事掟	松平定信	寛政6(1794)	×	×	×	×	○	古雅風流	
茶話真向翁	関竹泉	享和3(1803) 刊	×	×	×	×	×	交接礼和	
老の波	松平定信	文化2(1805)	×	×	×	×	×	人情を尽くす・風流	茶は殊に人に接待する道であり、心遣いを第一とする
茶湯由来記	松浦鎮信	文化3(1806)写	×	×	×	×	×	文武両道の内の風流	
茶旨略	片岡信賢	文化7(1810) 序	×	×	○	×	×	敬和・礼・敬礼・交接	敬和清寂の「寂」の一字こそ字眼であるという
賞茶或問	磯部忠貫	嘉永4(1851)刊	×	×	×	×	×	風雅礼譲・誠敬恭慎・幽静	
禅茶録	寂庵宗沢	文政11(1828) 刊	○	×	×	△	×	茶味禅味同味	「佗の事」という一項がある
法護普須磨	玄々斎宗室	安政3(1856)序	×	×	×	△	×	茶禅同一味	

茶則	速水宗達	安政5(1858) 序	×	×	○	×	×	交接・礼	敬を以て質と為し、和を以てこれを行い、清を以てこれに居、寂を以て志を養う、とある。清寂は志を養う根であるとする
茶道壁書	井伊宗観	安政5(1858)日付	○	×	×	△	○	茶味禅味一如	茶は侘を本体とするので常に質素倹約を守れとある
茶湯一会集	井伊宗観	安政5(1858) 頃	×	×	×	×	×	一期一会	
木の芽のすさひ	不明	安政6(1859)	×	×	○	×	×		
又玄夜話抜萃	又玄斎宗室	万延1(1860)	×	×	×	△	×	茶味禅味同一味・天地貫通	
利休居士茶之湯口伝	玄々斎宗室	万延1(1860)？	×	×	×	△	×	道心礼儀・茶味禅味同一味	
薄茶の点かた	橋爪貫一	明治17(1884)/1	×	×	×	×	×	交接礼和・親睦	
茶道早学	狩野宗朴	明治17(1884)/6	×	×	×	×	×	交接礼和	
茶の湯主客の手引	山内宗一	明治19(1886)/12	×	×	△	×	×	閑雅清廉淡白	和敬清粛が本旨
実地応用男子生涯之務	岡本可亭	明治23(1890)/4	×	×	×	×	×	無欲知足・禅学悟道	
千家正流茶の湯客の心得	中村浅吉	明治26(1893)/8	×	×	×	×	○	礼	茶道の徳として
茶之湯独案内	三田村熊之助	明治27(1894)/1	×	×	×	×	×		物に拘束されない、伝あって伝なし云々
女子家事訓	修文館	明治34(1901)/12	×	×	×	×	○		
茶禅一味	田中仙樵	明治38(1905)/3	×	×	○	○	○	不立文字・禅的趣味	茶禅一味の極意は只「寂」の一字にあるとする
The Book of Tea	岡倉天心	明治39(1906)/5	×	×	×	×	×		美の崇拝を根底とする。東洋民主主義の真精神を表現
芸術雑話	滝精一	明治40(1907)/7	×	×	×	×	○	和而不蕩	
茶道通解	松平直敬	明治42(1909)/3	×	×	×	×	×	仏道歌道茶道一味・和清・礼楽・足るを知る	天然自然の原理を獲得知覚するのが本旨
官休清規　四　序	木津聿斎	大正5(1916)/秋	×	×	○	×	×		茶道の要は和敬清寂を本とする
茶味	奥田正造	大正9(1920)/5	×	×	○	×	×		主客一如たる境が茶境
茶之湯道しるべ	青木恒三郎	大正10(1921)/8	×	×	×	×	×	閑寂・清（きよし）	茶の奥義はただ「閑寂」の二字で言い換えると「清」の一字
茶道銀杏之木蔭	西隆貞	大正12(1923)/3	×	×	○	○	×	不立文字	
茶乃湯の手引き	孤峰庵勇斎	大正14(1925)/9	×	×	×	×	○	清閑優雅・礼譲	清閑優雅を以て本旨とする
茶の湯作法	小田部胤康	昭和3(1928)/5	×	×	○	×	×		亀山宗月述
茶道	高橋龍雄	昭和4(1929)/8	○	○	○	×	×	風流・風雅	茶道は寂の芸術、道具の総合芸術、風流禅である茶道は「侘の文化」「寂の芸術」を形造り日本文化の純真たるものである
茶の湯のしをり	勢昭庵光斎	昭和5(1930)/1	×	×	×	×	○	清閑・礼譲	
茶心花語	西川一草亭	昭和6(1931)/3	○	○	○	×	×	薪水の労をみずからにして、一盃の茶を楽しむこと	利休の侘は形の上だけの侘。侘しい生活を真似そこに一つの美を見出した。利休は茶に寂の一字を加えた。茶はさびである。

茶道要鑑	玉置一成	昭和6(1931)/5	×	×	○	×	○	清雅・礼譲・風韻雅趣	茶道は精神修養の宗教
茶道と人生	浅尾嵐翠	昭和8(1933)/5	○	○	○	×	×		寂は「しずか」とも「さび」とも「わび」ともいう
Cha-no-yu（英）	福喜多靖之助	昭和7(1932)/9	×	×	×	×	×		茶を理解するには禅の哲学とそれに則った生活の理解が必要
Cha-no-yu（英）	A.L.Sadler	昭和9(1934)/5	×	×	×	×	×		わび、さびという言葉は散見される
茶道入門	井口海仙	昭和9(1934)/7	○	×	○	×	×		利休は侘を主として和敬清寂を本意とした
茶の湯のしをり	斎藤よし	昭和9(1934)/8	×	×	○	×	×	不立文字	利休が茶道の真髄とした和敬清寂の大精神が裏千家の茶
茶道	撫石庵緑堂	昭和9(1934)/9	○	○	○	○	×	礼和	侘茶は総合芸術
茶道読本	高橋義雄	昭和11(1936)/4	×	×	×	×	×	趣味感の満足	
実用茶道読本	木下桂風	昭和11(1936)/11	×	×	○	×	×	趣味性	本旨は精神修養、副旨は礼儀作法
千家草庵茶の湯の秘法	一箒庵宗心	昭和12(1937)/6	○	○	○	×	×	まこと	珠光の「和敬清寂」に利休が「まこと」を加えたという。さび・わびを忘れては茶道の永遠性と日本精神の伝統美が欠如する
Tea Cult of Japan（英）	宮部幸三	昭和12(1937)/9	×	×	×	×	×		茶を理解するには禅の哲学とそれに則った生活の理解が必要
Konnichi-an（英）	安斎辰造	昭和13(1938)/10	×	×	×	×	×	優雅・清浄・礼儀・落着き	茶を教え学べばモラルと審美的価値をもつようになるという
茶家必携　茶道便覧	木下桂風	昭和14(1939)/9	○	○	○	×	×		侘：観念的・主観的、寂：客観的・表現的
茶道妙境	千宗守	昭和15(1940)/1	○	○	○	×	×		真の茶道の精神である侘び・寂びは自ら努めて窄き門を入り、悟了するものでなければならない
茶道辞典	高橋龍雄	昭和15(1940)/6	○	○	○	×	○	勿体なの思想・超然思想・軽剽思想・風流など	茶道は禅の超然思想などが侘び寂びの風流思想に融解して、世界特有の風流道に大成された、という
日本茶道史	西堀一三	昭和15(1940)/9	○	○	×	×	×		珠光・紹鷗・利休などの茶道精神を「わび」「さび」で説明
お茶の心	柘植曹谿	昭和16(1941)/7	○	○	○	×	×		寂を「さび」「わび」「渋み」を総括したものと解釈、英米人には容易に解釈できないものとする
茶道のをしへ	辰川宗弘	昭和17(1942)/12	×	×	○	○	×	忠孝・家業精励・礼儀道徳	禅の境界即寂の境地
日本的茶道（『新女性文化』所収）	竹内尉	昭和18(1943)/1	○	○	○	○	×	礼・閑寂	珠光の「敬清礼」から利休の「和敬清寂」、利休が「寂」を置いてからわび・さびというどこにもなかった思想が生まれた
利休居士の茶道	千宗守	昭和18(1943)/4	○	○	×	×	×		「わび」「さび」は茶道精神の骨骸をなすもの
茶道の精神	竹内尉	昭和19(1944)/8	○	○	○	×	×	閑寂	寂が茶道の「わび」「さび」で利休の茶の特色は「寂」の体得

茶道ふと思ふ記	千宗守	昭和21(1946)/12	○	○	○	×	×		
茶道教室	佐々木三味	昭和22(1947)/1	○	○	○	×	×		茶道に到る最後の境地が「わび」「さび」である
行動芸術としての茶の湯	太田正子	昭和22(1947)/3	○	○	○	×	×		「寂」は茶道の到達点
茶道の実際	山村宗謙	昭和23(1948)/7	×	×	○	×	×		茶道は誠実なる常識道であるという
Cha-no-yu（英、和）	千宗興	昭和23(1948)/12	×	×	×	×	○	安逸・質素・礼譲・都雅	審美・経済・礼法の家庭聖典、総合芸術体系をもつ唯一の高尚文化
茶心	細谷喜一	昭和24(1949)/6	○	○	○	×	×	誠	
茶道入門	田中仙樵	昭和30(1955)/6	○	×	○	○	×	和楽・風雅の心	侘の心掛けがあれば茶に風情が出てくる、千家の侘主義
Cha-do：der Tee-Weg（独）	Otto Wilhelm	昭和33(1958)/?	○	△	×	×	×		
茶道の心	松浦素	昭和41(1966)/10	○	○	○	×	×	礼	礼は和敬清寂の基となるもの
The Art of Taking Tea（英）	千宗室	昭和42(1967)/?	○	×	×	×	×	風流	
茶道入門－作法と心得	井口海仙	昭和44(1969)/3	×	○	○	×	×	清浄礼和	珠光：清浄礼和→利休：和敬清寂
The Way of Tea（英）	千宗室	昭和46(1971)/?	○	○	×	×	×		利休の説明の項にあり
The Tea Ceremony（英）	田中仙翁	昭和48(1973)/?	○	×	×	×	×	禅・自然との調和・創造性など	
Chado（英）	千宗室	昭和54(1979)/?	×	×	○	×	×		
Tea life, Tea Mind（英）	千宗室	昭和54(1979)/?	○	×	○	×	×	風流	
和ごころで磨く	荒井宗羅	平成9(1997)/7	○	○	○	○	×	一期一会	和敬清寂の寂は「さび」を表現、利休の心は「侘びさび」
茶の湯随想	千宗左	平成13(2001)/5	○	×	○	×	×		珠光・紹鷗・利休などの茶道精神を「わび」で説明
裏千家茶道	千宗室・千玄室	平成16(2004)/4	○	×	○	×	×	一期一会	利休のわびは華やかなものを見、さびた世界も過ぎた清浄無垢な世界にあって、新しいものを作り出す生命力
わかりやすい茶の湯の文化	谷晃	平成17(2005)/4	○	○	×	×	×	覚悟・執心など	さびは俳句において重要、茶道にはあまり使われていない
珠光茶道秘伝書	村田珠光	不明	×	×	×	×	×	和漢の境をまぎらかす事	
紹鷗侘びの文	武野紹鷗	不明	○	×	×	×	×	古きを捨ず新しきを求めず	侘とは正直に慎み深くおごらぬさま、十月こそ侘
紹鷗門弟への法度	武野紹鷗	不明	○	○	×	×	×		
小堀遠州書捨文	小堀遠州	不明	×	×	×	×	×	忠孝・懈怠なく・旧友の交	
＜凡例＞○：該当する語彙があり重視されているもの、△：表現が似ており極めて近い意味と考えられるもの、×：表現がなく、重視されていないもの									

ヲ罄クスモノハ特リ茶道ニ如クハナカルベシ[9]

茶道は「質素」を旨とする、というのである。これは、明治時代に茶道が「奢侈遊興の芸」と思われていたことと無縁ではなく、それを否定しようとする意志が強く見られる。

「和敬清寂」という言葉が、現在にいたるまで重要視されている点は、大正期から変わらない。ところが、昭和になると「わび」、「さび」といった理念が重要視されてくる。もちろん、明治期にも「わび」、「さび」という言葉が茶道を説明する言葉として全く用いられなかったわけではない。明治二六年（一八九三）二月発行の『文学界』に掲載された星野天知（慎之輔：一八六二～一九五〇）「茶祖利休居士」という文章内に、次のような箇所がある。

松籟に腐肉を曝して草庵一縷の茶の煙りに浮世を看破したる幾多のすねものが、歌ひに歌ひし風雅の道久しく絶えてさびを言ふ者稀れになりぬ、東洋審美に特得なる、風雅のさびは禅の幽味に発して芭蕉の俳道と成り利休の茶道と成りけん、此二人は共に禅に因りて斯道を興し相携へて日本に風雅の天地を闢き、詩想道念固より差別なきにあらぬも斯道の為めには同腹の胎児たりしや疑ふべからず。

居士は『佗』を斯道の生命として卑俗の風雅を戒めんと勉めり、[10]

天知は、『文学界』の編集者であり、経営の責任者であった。自伝日記『星野天知』によると、「千家裏流中田宗閑氏に就き壮年に至り田中仙樵氏より奥伝許状を受く」[11]とある。この一文を収載する『明治文学全集』三二（筑摩書房）の笹淵友一（一九〇二～二〇〇二）による「解題」には、「『文学界』同人はその形而上的浪漫主義の立場から利休と茶道に関心をもった。『茶祖利休居士』はその現われであ」るという。[12]『文学界』によった面々の興味は、言葉では恋、風雅、風流、人物では芭蕉を筆頭に西行、兼好法師などであった。西行から芭蕉へとつながる一連の風雅な人物の一人として利休も評価されたのである。ここに『笈の小文』における「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休の茶における、其貫道する物は一なり」という言葉の力が働いている事は明らかである。しかし、天知ほど利休を評価していた人物を『文学界』周辺にも他に見出だし得ないことから、天知はかなり当時としては特異な存在であったと思われ、こういった利休評価が広く享受される事はなかったと考えられる。ともあれ、天知ほど「わび」、「さび」という理念を重視した言説は、明治期の他の文献には見られない。

さらに現今、茶道において使われる「わび」や「さび」といった言葉に負のイメージをもつ人はいないが、明治時代には必ずしも正のイメージばかりではなかった。例えば、明治三九年（一九〇六）

八月発行の雑誌『新小説』第一一年第八巻には小常磐主人（生没年等未詳）の「『さび』と詫（わび）」という談話が載っている。そこでは、「わび」や「さび」そして「渋い」といった言葉が、次のごとく語られている。

茶道に就て、『さび』や渋味のお話をするやうにとのお言葉ですが、全体の言葉から言つて、『さび』とか『渋い』といふのは、賛（ほ）めて言ふのではないのでごわすよ。（中略）『さび』や『渋味』は、まあ謂つて見れば廃物（すたりもの）ですよ。（中略）茶道の方で『詫』といふ事があります。『詫』はよくいふ詫住居（わびすまゐ）のわびで、詫住居は一寸仮の住居といふやうな意味合ひです。仮の住居は仮の茶事をするといふ場合に、爐は勿論の事、諸道具共に、誠に不揃で、不完全な、不整頓なものばかりで客を招く事であるから、その詫住居の主人が客に対して、誠に『さび』た所をご覧に入れます、諸事不揃で『渋い』所はお許しを願ひたいものですなどゝ、謂つて見れば、自分を卑下し謙遜していふのに、この『さび』や『渋味』を使つたものなのでごわす。それを茶の席に出て、この爐は『さび』が附いて佳いの、その茶碗は『渋く』て結構だのといふのは、客の方から賛めやうとして、実は主人を辱しめるのですから、この言葉の用ひやうはよくよく心を用ひないと、末に大した間違ひとなりませう。(13)

もし、「わび」や「さび」といった言葉が、茶道の根本理念、もしくはその美を表現する美的概念となっていたなら、このような言説はでてこないはずである。このことからも、明治時代の茶道においては、「わび」や「さび」といった言葉が根本理念として頻繁、また広範に認知されていたとは到底考えられない。

では、「わび」や「さび」が茶道の根本理念としてほとんど使われなかった明治・大正時代に「わび」や「さび」はどこで、どのように語られていたのであろうか。それを次に確認しておきたい。

（3） 茶室・茶庭・茶道具から根本、美的理念へ

明治・大正時代、茶道において「わび」、「さび」が語られたのは、茶室と茶庭、そして茶道具においてであった。茶道の根本理念として「わび」、「さび」が語られていない茶書にも茶室、茶庭、茶道具を形容する言葉として、「わび」、「さび」という言葉が使用されている。例えば、明治二六年（一八九三）刊の『茶道要録　茶室構造法』では、茶室の規模について「其屋宇全体の規模及ひ其（ママ）意匠の基く処は紹鷗利久（ママ）が侘といふことを本とせしに依る」、あるいは「利久（ママ）より以後ハ侘と云ふことを専らとし景色ハ露地の間に見せしめ室は観心三昧の道場とせし故室内より庭前を見心意を散乱せしめさるを主とす」とある。(14) また、「さび」については「湊紙の腰張りにく

ずの有るを張ると云へばさびて聞ゆれど見ては宜しからず（中略）聞けばさび立たるも見れば一向さびぬもの」などとある。[15]

また、明治四〇年刊の『茶の湯の心得』では、建仁寺にある正伝院如庵の寄壁の腰貼を評して「是これは古暦を以つて貼つてあるナカナカにわびた趣向」[16]だとしている。そして、明治末期から出版された茶会記、野崎広太（幻庵：一八五七～一九四一）『茶会漫録』、あるいは高橋義雄（箒庵：一八六一～一九三七）『東都茶会記』、『大正茶道記』、『昭和茶道記』などには、ある種の風情、茶道具などを形容した言葉として「わび」、「さび」という言葉が頻出する。このように茶道の世界では、根本理念としてではなく、その周辺において「わび」、「さび」といった言葉が絶えず使われていたのである。これが、昭和初期に茶道の根本理念、美的概念へと次第に格上げされていく。

茶道における「わび」、「さび」の価値上昇に大きく貢献したのが、高橋龍雄（梅園：一八六八～一九四六）の『茶道』（昭和四年刊）という書物であった。そこには以下のような記述がある。

> 利休の茶は珠光の謹敬清寂を、和敬清寂として、この四つの題目を茶道の本体とし、茶事が華美に流れることを堅く戒めたものだ。茶道と禅道とは全くその根基を一とする。彼は宗教禅で、此は風流禅である。而してこの風流禅たる茶道は、日本固有の国民性と合致して、世界無比の「侘びの文化」「寂びの芸術」を形造り、未来永劫日本文化の真純なるものとして生きてゆく所のものである。[17]

そして、次のようにさえ言い切るのである。

> 日本人の視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚、すべてこれ「寂び」の息のかゝらぬものはない。換言すれば茶禅の趣味が、日本固有の民族性に最も適合してゐるのだ。而して「寂び」の最も直覚的本能的の表現は所謂「お茶」である。[18]

「わび」、「さび」といった言葉を多用するこの書は、決して突然出てきたものではない。高橋の『茶道』には、恐らく、二人の人物の影響が及んでいるものと思われる。一人は、高橋義雄（箒庵）であり、もう一人は笹川種郎（臨風：一八七〇～一九四九）である。

高橋義雄（以後、箒庵とする）は、益田孝（鈍翁：一八四七～一九三八）と並ぶ「近代数寄者」の代表的人物である。彼の功績で特筆すべきは『東都茶会記』をはじめとする多くの茶会記を残したこと、それに『大正名器鑑』という名物記を完成させたこと、などが挙げられよう。彼の茶会記は、ただ道具類や客組だけを記すものではなく、読物として楽しめるような茶会記であった。表千家の茶匠川部

宗無（一八四九～一九二七）、藤谷宗仁（生没年未詳）に茶の手ほどきを受けたという。『茶道』の著者、高橋龍雄は、慶応大学の教授として国語・国文学を教えるかたわら、茶道の研究に打ちこみ、『大正名器鑑』作製事業の推進役を果たした人物である。「名物陶器の史的研究」において、茶道に親しむようになった事情を次のように吐露している。

私は出雲に生れ、松平不昧公の茶道に就て僅にその平手前と懐石の稽古をしたのが、明治二十四五年私の二十一二歳の頃雲州平田町に居つた時のことであります。其後上京して学生となつたのであるが、素人下宿の二階で抹茶をのんでゐたので、友人から珍らしがられたり笑はれたりしました。明治三十一年国学院卒業の後或は駄著の濫作に追はれ、私の茶趣味は殆ど破壊されて了つた。大正二年の頃から三年間、松平直亮伯からの御話で不昧公百年忌の為、公の伝記の編纂をすることになつて、茶趣味は再び勃然として湧き出しました。[19]

早くから茶道に親しんではいたが、本格的に興味を持ち始めたのは大正二年（一九一三）以降のことであるらしい。その後、大正末まで箒庵とともに『大正名器鑑』の調査、編集のために多くの時間を割く事になる。この背景には、茶道人口の増加や、『茶会漫録』、『東都茶会記』などの連載による茶道への興味の強まりなどがあった。この箒庵との出会いと共同作業が、『茶道』を執筆するほどの知識と経験と自信の源泉となったことは間違いない。一方、茶道への関心の高まりは、何も茶道実践者だけにはとどまらなかった。大正中期から、歴史学の方でも文化史というものが、脚光をあびるようになってきた。従来の歴史は政治史が中心で、事件の真相を明らかにすることが主な目的であった。しかし、人間の生活やその情熱が、どのように文明を作り上げてきたか、その文明の進歩の跡をたどることが求められるようになってきた。歴史を民衆的に、文化的に、そして芸術的に改造しようとする動きが高まってきたのである。その結果、政治的には「暗愚」といわれた足利義政（一四三六～一四九〇）なども文化史においては「大恩人」と評価されるようになるのである。高橋龍雄も大正一三年の時点で、茶道が芸術的、経済史的、文化史的に意義があることを強調した上で、「かやうに研究範囲の広漠な茶道は、決して一人や二人の学者に研究さるべきものでありません。各々方面の学者が各々手わけをして、一つ一つ研究して行かなければなりません」と主張していた。[20] 笹川種郎は、高橋龍雄の要望に文化史的な面から応え、また『茶道』執筆に刺激を与えた一人であった。

笹川は、雑誌『帝国文学』などの編集も行なっていた文学者、評論家であり、また歴史学者でもあった。明治期の笹川は、江戸的な

もの、あるいは中国的なものに強い関心を示していた。佐々醒雪（一八七二～一九一七）や田岡嶺雲（一八七〇～一九一二）らと「筑波会」という俳句会を結成し、句作と研究などを行なっていた。それが大正期になると、現代文化の源泉として、「東山時代」に笹川の目が向けられるようになる。大正元年（一九一二）には「文化史上に於ける東山時代」を[21]『史学雑誌』に、大正七年には雑誌『歴史と地理』に「東山時代の文化概説」を寄稿するまでに知識が蓄積されていた。[22]そして大正一三年には『東山時代の文化』で文学博士号を取得。これは最初、昭和三年六月に博文館から刊行されたが、昭和一八年には「茶禅一味」という文章を加え、創元社の「日本文化名著選」にも入れられて再刊されている。田岡嶺雲は『うろこ雲』（明治三八年刊）の中で笹川を、「彼が風采は即ち瀟洒たる一箇の風流才子、間雅（ママ）整飭、又多能にして、謡をよくし、清元をよくし、茶を点じ、花を挿くる等、宛然たる往日旗下の貴公子」と評していることからも窺えるように、明治期にはすでに茶に親しんでいたと思われる。しかし、笹川の文章に茶道についての言説が見られるようになるのは、大正期に入ってからであった。『中央公論』などに発表した文章でも、度々茶道について触れている箇所が見られる。笹川の明治・大正期における研究の到達点が、『東山時代の文化』であった。その第五章は「茶道と文化」と名付けられており、そこには「江戸から今日まで我が民族が有する趣味は、全く茶道に依りて養成せられたのである」、あるいは「茶道は我が民族趣味の根本である」[23]という文言がある。笹川は、それほど「わび」や「さび」といった言葉をここでは発していない。しかしながら、茶道が文化史的に重要なものであることを、認識させた功績は高く評価されてよい。それも学問的にまとまった研究成果としてこのような考えを世間に認めさせたのである。[24]本格的な茶道研究は、ここからスタートしたといってもよいだろう。高橋龍雄は、遅くとも明治三〇年頃から笹川の意見に対し興味をもっていた。彼の書いた文章には、笹川のことがたびたび出てくるし、笹川は大正中期から昭和初期の文化史研究を、先頭に立って牽引してきた人物であった。笹川の興味対象、すなわち俳句、茶道、美術などと高橋龍雄のそれが重なっていたのが一つの原因かと思われる。ともあれ、箒庵と笹川臨風から強い影響と刺激を受けて、『茶道』は書かれたのである。

高橋龍雄が『茶道』を出版した当時、建築の分野でも、「わび」、「さび」の関係に注目が集まっていた。とりわけモダニストと呼ばれる建築家がそこに深く関わった。例えば、ル・コルビュジエ（一八八七～一九六五）に直接弟子入りした建築家、牧野正巳（一九〇三～一九八三）は昭和五年（一九三〇）に発表した「建築に現はれたモダーニズム」で、外国人は「わびしさ」や「さび」というものを知らないから、単純化された建築にも魅力がない。しかし、日本人はそういう「原始的な単純」ではなく、「もつと洗練された単純」

を求めており、それは畢竟、茶室建築に還元されるというのである。そして、「欧州の一流建築家は日本の茶室建築の図版を珍重し之を手本としてゐる」とさえ断言する。さらに「日本を見直せとか、日本に還れとかいふスローガンは、実は、偏狭な国粋主義でもなければ、反動的なフアツショでもな」く、「国際的建築へ合流する捷径であり。ママ国際的建築に於て指導的な位置に立つ道である」という。[25]

茶室建築については、大正時代から岡田信一郎（一八八三～一九三二）、中井宗太郎（一八七九～一九六六）などによって、その合理性、実用と趣味の調和、純日本趣味である点、自然と建築の融合などが高く評価されることはあった。[26] また、哲学者、田中王堂（一八六七～一九三二）も茶室を「象徴主義」が顕現したものとして評価していた。[27] だが、モダニストの茶室評価は、単なる日本趣味や象徴主義の発現という点にとどまらず、国際建築としての優秀性を謳ったところに特色がある。茶室が単なる過去の建築ではなく、実は未来の日本建築の行方をも左右するような建築であるというのである。このような言説が、建築界に蔓延していく。城戸久（一九〇八～）なども「さびの展望」において「日本の建築精神とは『さび』である。『さび』は日本に関する限りに於てかつて存在したものである。従つて『さび』を将来の日本建築を解決すべき鍵であるとするならば、少なくとも言う処の国際建築に対して何等の矛盾や撞着をも生じないと思ふ」と主張していた。[28]

茶室における問題はともかくとして、『茶道』において「わび」、「さび」が茶道に不可欠な要素として結び付けられたことは確かである。

このように茶室や茶道具に用いられていた語が茶道の美的概念として昇格するケースは他にもある。現在、小堀遠州（一五七九～一六四七）の美意識を表す言葉として使われている「きれいさび」という言葉が、その好例である。詳細は、拙稿「小堀遠州と『きれいさび』――美的概念用語の成立過程」を見ていただきたい。[29]「きれいさび」という言葉は箒庵の造語と思われ、『東都茶会記』などの著作の中で、ある種の風情をもった茶道具を形容する言葉として用いていたものであった。それが高橋龍雄の『茶道』によって、小堀遠州や、遠州の生きた時代が有していた美意識を表す言葉として規定された。その後、「きれいさび」を小堀遠州だけに特化し、固定化したのが、江守奈比古（一九〇二～一九九二）、西堀一三（一九〇三～一九七〇）、森蘊（一九〇五～一九八八）、藤島亮治郎（一八九九～二〇〇二）、重森三玲（一八九六～一九七五）といった茶道、庭園研究者、建築家の面々であった。昭和一四年（一九三九）以降のことである。

「きれいさび」という美的概念についても、高橋龍雄の『茶道』が、一つの大きな転換点となっていることがわかるであろう。「わび」、「さび」という美的概念にとっても、『茶道』は大きな変節点であっ

たのである。

2 「わび・さび」への道程——結合における三つの要因

高橋龍雄が『茶道』を出し、「わび」、「さび」が茶道と結び付けられたからといって、ただちにそれが定着したわけではない。それはあくまでも起点でしかない。これが定着するには、さらにいくつかの過程を経なければならなかった。それを順に見ていこう。

(1) 「風流」、「日本趣味」からの出発

まず、花道去風流七世家元、西川一草亭(一八七八〜一九三八)が主宰した雑誌『瓶史』のサロン的雰囲気が、それを醸成する場となった。この雑誌には、薄田泣菫(一八七七〜一九四五)、などの文学者、小宮豊隆(一八八四〜一九六六)、和辻哲郎(一八八九〜一九六〇)などの漱石門下の研究者、藤井厚二(一八八八〜一九三八)、堀口捨己(一八九五〜一九八四)などの建築家、そして西堀一三、肥後和男(一八九九〜一九八一)といった京大国史学の若手研究者といった面々が集まった。そのため『瓶史』は地方の一同人誌という枠をはるかに越えた文化サロン的な雰囲気さえもつ総合文芸雑誌となった。昭和六年一月からは、花道、茶道、庭園、建築など日本趣味の研究を主眼とする季刊雑誌として一般にも販売された。一草亭が書いたであろう同年四月号に載る「巻頭語」には、次のようにある。

> 「瓶史」は単に吾々同人が挿花を研究する季刊雑誌である許りで無く、同じ根底から生れた庭園、茶の湯、日本建築のすべてを通じて、夫れを現代に生かす方法を講ずる事に一つの使命を持ちたいと思ひます。(30)

誌上では、茶道が多方面から論じられた。一草亭の興味は決して茶道だけにはとどまっていない。しかし、幼少の頃から茶に親しんでいたこともあって茶道にも強い興味を示していた。大正一一年(一九二二)八月には『中央公論』に「千利休論　茶の湯の考察」を発表している。彼が追求したかったのは、「風流な生活とは何か」ということであった。『瓶史』には「わび」、「さび」といった言葉が登場し、中には茶道の代名詞のようになっているケースもある。『瓶史』からの引用ではないが、一草亭が「わび」、「さび」について語った部分を見ておこう。昭和六年三月に刊行された『茶心花語』にある記述を見てみよう。一草亭は、茶道の主意とは「薪水の労を親らする事」であり、利休は「一宇の草庵に薪水を親らして、一碗の茶を気持よく飲む事を、目的にした」という。(31) そして、「わび」、「さび」に関しては次のように述べている。

利休の倹素、侘と云ふ事は畢竟、その形の上丈けの侘である。侘しい生活を真似て、そこに一つの美を見出し、そこに一つの興味を感じたのである。藁屋根の茶室を建てゝ百姓の生活を真似、欠茶碗、竹篦を使つて貧乏人の生活を模倣したのである。決して百姓になり切つたのでは無い、貧乏人になり切つたのでは無い。寧ろ利休は其四畳半裡の擬似百姓生活に秀吉の桃山、聚楽以上の贅沢な気持ちを自得して、秘かに夫れを自負して居つた形がある。[32]

そして、楽茶碗を造ったり、三畳二畳といった小庵を思いついたり、茶室ににじり口をつけた位で、利休があれほど高名を馳せる功績があったとは思えないとして、

が唯一つ利休の造詣の深さを思はせるのは、茶の湯の上に寂の一字を加へた事である。珠光は茶の湯の標語として「清浄礼和」の四字を説いた（中略）が、利休は其四字を改めて、和敬清寂の四字を説いた。敬と礼とは同じ様な物だから、利休の改めたのは寂の一字である。

茶は寂である。閑寂幽玄の物さびしい中に、華美贅沢の知らない、美があるといふ意味を指示した事は、何と云つても、利休の大なる功績であつたと思ふ。この寂の一字に依りて、茶の湯は世界に類の無い、特殊な文化を四畳半裡に建設した。[33]

と利休が「寂」（「じゃく」あるいは「さび」）というものを茶道に加味したと、高く評価している。

これらの引用から、一草亭の考える茶道は、まさしく利休が創始したとされる四畳半の「わび茶」で、それは「さび」の世界であったことがみてとれるだろう。一草亭は利休に心酔しているわけではないが、自分たちの目指す茶道は、利休の茶の精神を受け継ぐものに他ならなかったのである。

『瓶史』に遅れること五年あまり（昭和一〇年）、西川一草亭に刺激を受けたとおもわれる竹内尉（撫石庵・一八九〇～一九六五）が東京で、『日本趣味』という雑誌を発刊する。竹内は、日置当流弓術範士、浦上栄（一八八二～一九七一）に教えを受けた弓道家であった。それがどうしたきっかけからか、茶道に興味を持つようになった。彼は「日本趣味愛好会」というものを作っているが、顧問に一草亭、市島春城（一八六〇～一九四四）、長谷川如是閑（一八七五～一九六九）、津田青楓（一八八〇～一九七八）、小山松吉（一八六九～一九四八）、後藤朝太郎（一八八一～一九四五）、同人として竹内のほかに、西村文則（生没年不詳）、鵜月左青（生没年不詳）、本山荻舟（一八八一～一九五八）が名を連ねている。この雑誌と、竹内の著書には茶道の「わび」、「さび」が何度も論じられている。竹内は、執筆活

動だけでなく、度々講演も行なっており、そこでも茶道の「わび」、「さび」について論じていた。さまざまな広報活動を通して茶道の「わび」、「さび」を強調して説いていたのである。

ともあれ、西川一草亭サロンは、昭和一〇年代に本格的に展開される茶道の「わび」、「さび」化を用意する場となったのである。

(2) 創元社『茶道全集』の刊行と、西堀一三

茶道研究に画期的な事件が昭和一〇年から一二年にかけて起こる。大阪の出版社、創元社から『茶道全集』全一二巻が発刊されたのである。[34] そもそものきっかけとなったのは、創元社社長、矢部良策(一八九三〜一九七三)が西川一草亭に随筆集執筆を依頼するために一草亭を訪れたことである。大谷晃一(一九二三〜)によれば、矢部が初めて一草亭のもとをたずねたのは昭和六年一一月八日であったという。[35] 翌年三月には一草亭の『風流百話』を定価五円で出版した。

それ以上に矢部にとって収穫であったのは、一草亭のもとにあつまっていた文化人たちとの出会いであった。とりわけ、西堀一三とは碁をしばしば打つほどの親しい仲になった。西堀は京都帝国大学文学部史学科を出て研究室にのこっていた学者で、一草亭を深く尊敬し、雑誌『瓶史』の編集を刊行当初から請け負っていた。その関係からか、茶道と花道にはとりわけ関心があったようである。

やがて矢部と西堀は、『茶道全集』の発刊を思い立つ。そこには流派を超え、茶道に関する知識を広めようとする意図があった。昭和一〇年のことである。当時の創元社には、昭和七年に出した谷崎潤一郎(一八八六〜一九六五)の『春琴抄』でつけた資力があった。西堀はまず重森三玲を誘った。西堀と重森は、淡々斎千宗室(一八九三〜一九六四)の弟である井口海仙(一九〇〇〜一九八二)を訪ね、協力を求めた。矢部は当時大阪毎日新聞学芸部にいた高原慶三(杓庵・一八九三〜一九七五)に協力を願った。はたして、顧問に正木直彦(一八六二〜一九四〇)、高橋義雄、監修に淡々斎千宗室と愈好斎千宗守(一八八九〜一九五三)、編集に西堀、重森、井口、高原のほかに粟田有声庵(一八七八〜一九五三)、佐分雄二(生没年未詳)を迎え、『茶道全集』は刊行された。これは本邦初の茶道全集であるだけでなく、堀口捨己がいみじくも喝破したように、「茶をのむ」だけの時代から「茶をよむ」時代の到来を告げるものであった。[36] ここでは勿論、茶道における「わび」、「さび」といった問題が取り上げられ論じられている。

例えば、松山米太郎(吟松庵・一八七〇〜一九四二)「さびの弁」という小論の冒頭には、「茶道の真諦は唯寂の一字に帰する」とある。[37] 西堀一三の「侘びの胎生」には、「『侘び』若しくは『さび』の語は茶道に於ける精神的態度を示すものとして、屢々用ゐられるところであるが、これは一般日本精神史を考ふる上に於ても考慮すべ

きものであるとかねて思つて居た」とある。[38] また、竹内尉の「侘びの心境」には「文人茶には侘の方面が多く、抹茶には寂の世界が多いやうに思はれる」ともある。[39]

それだけではなく、この全集では『南方録』をはじめ多くの茶書が活字化された。そこにも「わび」や「さび」に関する言葉が少なからず登場した。これによって茶道の「わび」「さび」化が一層進んだと考えられる。このように創元社が茶道の「わび」、「さび」化に果した役割は大変大きかった。

ここで出版社の寄与という観点から見れば、東京では第一書房の果した役割も無視できない。第一書房は、主に随筆集で茶道の「わび」、「さび」化に貢献した。西川一草亭の『風流生活』や、哲学者、得能文（一八六六～一九四五）の『浅人零語』、『沈黙の疑問』、『さびしき心』などには、茶道と「わび」、「さび」の関係が縷々述べられている。創元社ほどではないにしろ、第一書房も茶道の「わび」、「さび」化に関与している事は確実である。

（3） 茶道の「わび」化――千家、禅学者、歴史学者の協同作業

戦前、茶道は「わび」というよりもむしろ、「さび」という概念で語られることが多かった。茶道が日本文化の一発展型として考えられていたからである。それは、芭蕉が完成したとされる「さび」の美へと続くプロローグであった。しかし、現在は茶道といえば「わび」といわれることの方が圧倒的に多い。これには少なくとも二つの要因を指摘できる。

一つは、千家流茶道が第二次大戦前から戦後にかけて飛躍的に発展したことが挙げられる。三千家中、もっとも早く千家流茶道の「わび」を強調したのは武者小路千家であり、その九代家元、愈好斎千宗守であった。大正一四年（一九二五）八月恩賜京都博物館夏季講演会で、利休の流れを汲む千家の茶道を「純粋侘の茶道形式」と規定した。[40] そしてそれは、遠州流などの書院式の貴族的で荘厳な茶道ではなく、草庵式の平民的な茶であることを強調していた。しかしながら、千家流茶道の「わび」化に多大な影響を与えたのは、表千家が昭和一二年（一九三七）に機関紙『和比』の定期刊行を開始したことである。「『わび』の弁」と題された巻頭言は次の通りである。

> 数百年の伝統を有する茶道は、不滅の精神を有して居る。殊に近年我国文化の再検討、国民精神の高揚が唱へられ、この思潮は茶道にも及んで、少壮の人々の間にも勃然と茶道研究の傾向を見出し、真に茶道を知らんとする声は諸方より起つて居り、他方茶道そのものに於ても、今日ほど隆盛を極める時代は、今迄に恐らくあるまい。
>
> 茲に於て微意非力、「わび」を創刊し、敢て世間に問ふ所以

は、茶道に於ては、百般の基をその精神わびに置くのであるが、この精神は一見明らかなる如くして、実は未だ考究の余地が多く、期する処は、茶道の精神、並びにいやしくも茶道に関する一切の事項の究明に在つて、総て内容は形式に盛るもの、故に実際的の技礼に就いても、深い関心を有する事を特記して置かう。[41]

『和比』の発刊は、先に触れた創元社版『茶道全集』の刊行に刺激されたものであるが、関東にも大きな勢力をもつ表千家が「わび」を標榜したのは、千家流茶道にとっては大きかった。ここにおいて〈千家流茶道＝わび〉という図式が、構築されようとしていた。だが、この図式が完成し、固定化するのは、昭和三〇年代以降のことである。戦前は、たとえば裏千家の機関誌『今日庵月報』やその後続誌『茶道月報』において、「わび」や「さび」といった概念がとり上げられることは少なかったし、また武者小路家の機関誌『武者の小路』ではむしろ「さび」との関係が取り上げられることが多かった。それでは何故、茶道は「わび」化していったのだろうか。そこにはもう一つの要因が大きく関わっている。

図1　裏千家と「わび」、「さび」(『読売新聞』昭和26年(1951)1月15日朝刊3面)

もう一つの要因とは、一九五〇年代から起こった世界的な「禅ブーム」であった。そこでは、大名系の書院式茶道はほとんど無視され、千利休から、その孫の千宗旦(一五七八～一六五八)の系統が完成させた「わび茶」だけが注目された。とりわけ、鈴木大拙(一八七〇～一九六六)、久松真一(一八八九～一九八〇)、古田紹欽(一九一一～二〇〇一)などにその傾向が強かった。鈴木大拙は、昭和一三年(一九三八)に出版された『禅の講座』第六巻(『禅と文化』)に、「茶と禅」という文章を書いた。その中で大拙は、「茶の生命は清と寂とに在りと云ひたい」とし、「寂」(大拙はこれを「さび」に通じるものと把握している)の一面に「貧乏主義」があると主張する。

そして、「わび」も「貧乏主義」であるとして、次のように言うのである。

とに角、禅と茶とは貧乏趣味である。枯淡澹泊と云ふも、佗数奇と云ふも、貧乏趣味に外ならぬ。たゞこれを消極的に見ないで、積極的に見るところ、経済的物質的に批判しないで、其背後に至大なものの存在を認め、これに連関して考へるところに、茶趣味の尋常ならぬものがあるのである。茶と禅との関係の密なものがあるのである。[42]

大拙よりも積極的に茶道の「わび」化に関わったのが、久松真一であった。彼の唱える「心茶」は利休時代の「わび茶」であった。久松は、茶道の正流を「わび茶」とし、茶道の生活体系は「わび」という原理に貫かれていると説いた。そして「わび茶」を行なう「わび茶人」を次のように評価している。

佗茶人というものは、物をもたないのを生かすというところに非常に大きな意義があると思うのであります。何もないところを生かすというようなところに非常に深い意義がある。いわば無を生かす、あるいは無が生きた無であるところに大きな意義があると思います。佗とは有以上の生きた無であります。[43]

久松は、昭和一六年に京都帝国大学内に「京大心茶会」を設立した。この組織は、昭和三一年、創立一五周年を機に、全国組織「心茶会」となり、「京大心茶会」はその一支部となった。彼は、終生一貫して「わび」の茶を説き続けた。彼の目指す「東洋的無」の理想郷と、茶の「わび」の精神とが一致したのである。

禅研究者だけではない。学者もその傾向を促進させた。芳賀幸四郎（一九〇八～一九九六）、中村直勝（一八九〇～一九七六）、林屋辰三郎（一九一四～一九九八）、桑田忠親（一九〇二～一九八七）などの学者たちがそれに加担した。桑田は別として、それ以外はすべて京都帝国大学史学科出身、あるいはその弟子筋にあたる学者たちである。〈禅の精神＝わび茶の精神〉という図式を強調する時流に、千家流茶道の各流派もうまくのった。とりわけ、戦前から海外への茶道普及を進めていた裏千家は、久松真一などと共に各国をまわり、「わび茶」を広めようとし、それがまた当たった。

そして現在では、『裏千家茶道』（平成一六年発行）という教則本のように「わび」という概念だけが詳しく説かれるといった状態にある（表1参照）。そこには、「〝わび〟は茶道において最も重んじられ、究極の目的とさえ考えられています」[44]とあって「さび」については説明がなされない。これも、禅との関わり、そして利休の言葉を伝え、「茶道の聖典」とさえ仰がれることもある『南方録』を

重視しすぎることに起因するものである。その「滅後」には、「佗ノ本意ハ、清浄無垢ノ仏世界ヲ表シテ」云々とあってこれが「わび」の重視にも繋がっているのだ。

おわりに

以上本稿で明らかになったことを整理しておこう。

① 元禄期の茶書には「わび」、「さび」について語っているものは多いが、江戸時代を通じてみれば、それは少数でしかない。

② 明治期には「質素・質朴」、「礼儀」などが重視されていた。大正期になると「和敬清寂」が根本理念（本旨）として強調され始め、昭和期にはその「寂」の部分を「わび」や「さび」で説明する書物が多くなってくる。第二次大戦前は「さび」の方が有力であったが、戦後は、「わび」が最重要視されるようになった。

③ 「わび」や「さび」は明治期から大正期には主に茶室・茶道具などを形容する言葉として用いられることが多かった。それが帰納的方法により茶道に集約されたのである。最初にこの態度を明瞭に打ち出したのが高橋龍雄（梅園）の『茶道』であった。

④ 茶道と「わび」、「さび」が結合した要因として、三つのことが考えられた。一つは、大正期から盛んに論じられた「風流」や「日本趣味」が、文化ナショナリズムが昂揚していく中で非常に注目されるようになったこと。二点目は、創元社の『茶道全集』の刊行と西堀一三の活躍であった。ここまでで、茶道の「わび」、「さび」化は一応完成したといってよい。三点目は、戦後の「わび」への特化に関するものであるが、家元、禅学者、そして京都帝国大学史学科出身の学者ないしはその弟子筋たちによる日本文化史論がよく読まれたことである。

⑤ 全体的に言える事は、茶道の「わび」「さび」化は、主として京阪神中心の文化によって形成されたものである。

本稿によって以上の事が明らかになったが、これらの事実から、いま一度、茶道とは何かを考えてみると、従来の茶道研究に疑問を感じる事も決して少なくはない。いまその全てを言い尽くすことはできないが、その内の一つを指摘しておきたい。

それは、「はじめに」でも述べたように、「わび」、「さび」といった美的概念をそれほどまでに解明しなければ、本当に茶道研究は進まないものだろうか、という疑問である。もちろん、「わび」や「さび」といった言葉を用いていないからといって、それがすなわち軽視されていたと判断することは、早計に過ぎるであろう。また口伝として教えられてきた可能性もある。しかし、茶書において他の言葉が用いられているということも、それはそれで意味のないことではない。時代がその言葉を要求していたのである。そして、茶道を学ぶ人々も、当然その言葉で茶道を理解したであろう。たとえ

ば、ある茶書に茶の根本理念は「簡素」である、と書いてあったとしよう。その場合の「簡素」という言葉と、現在重視されている「わび」という言葉は、決してイコールであると断定できない。同じ意味を共有しながらも、その言葉が指し示す範囲は当然異なる。それを見落としてはならないということだ。何故「簡素」を強調していた茶道が、現在は「わび」「さび」といった言葉で表現されるようになったのか、を熟考する必要はないだろうか。従来の茶道研究は必要以上に「わび」、「さび」、特に「わび」といった言葉の解明と定義付けに精力を注ぎすぎてきたのではなかろうか。その元凶となっているのは、本論考中に述べた〈茶道＝わび・さび〉という図式であり、この図式の裏には実はもう一つの図式、〈茶道＝利休の茶道〉が隠されているのである。そしてわび茶の草創期に書かれた書物（例えば『南方録』）を、必要以上に重視しすぎる傾向も、それに拍車をかけていると思われる。

茶道全体を見渡しながら研究を進めるためには、少なくともこの点を念頭に置いておかねばならない。そうしなければ、茶道がたどってきた歴史を見誤ることになる可能性もある。もちろん、初期の茶書の影響力は無視できないし、その解明は大切な作業であり、「わび」、「さび」という言葉の解明についても同じことが言えるだろう。かつて石田吉貞（一八九〇～一九八七）が『隠者の文学』において行なった、禅の影響を受けた文化、たとえば「わび茶」のようなものは、その本質と影響との区別を、はっきり析別しなければならない。ところが、「わび茶」の本質は、「わび」という美と飲料としての茶とが結合したところに根源があり、その段階では、まだ禅の影響はないのであるから、「わび茶」の本質を考えるには、その段階、すなわち「わび」という美と飲料としての茶が結合した段階において考えられなければならない。

それには、「わび」という美が、どのようにして生じ、どのようなものであったか等、「わび」の美に対する検討が、徹底的に行なわれなければならない。[45]

という提唱も十分傾聴に値する。だが、茶道の草創期、ないしは江戸時代（とくに元禄期まで）はともかくとして、その内容、美意識が現在の茶道まで連綿と受継がれてきたかのような記述がなされることについては、正直、疑問を抱かざるを得ない。茶道全体を見れば、「わび」、「さび」という言葉、美意識だけでは説明しきれないことも当然あるだろうし、できないことの方がむしろ多いのかもしれないのである。本稿が茶道の根本理念ないし美意識をもう一度再考する契機となれば幸甚である。

注

(1) 井口海仙・末宗廣・永島福太郎監修『原色茶道大辞典』、淡交社、昭和五一年四月第三版、九五九頁

(2) 林屋辰三郎他編『角川茶道大事典』、角川書店、平成二年五月、一四七一頁。島津忠夫執筆担当

(3) 復本一郎『さび― 俊成より芭蕉への展開』、塙新書、昭和五八年七月、三一頁

(4) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』第二巻、角川書店、平成一一年四月再版、七一二頁

(5) 前掲『原色茶道大辞典』、四〇一頁

(6) 前掲『角川茶道大事典』、五六一頁

(7) 前掲『原色茶道大辞典』、四〇一頁

(8) 千宗室編『茶道古典全集』第三巻、淡交新社、昭和三五年一一月、三七五頁

(9) 堀内正路『千家正流茶の湯客の心得』、中村浅吉発行、明治二六年八月、一丁表。

(10) 星野天知「茶祖利休居士」『明治文学全集』三二、筑摩書房、昭和四八年九月、二〇九頁。初出は『文学界』第二号(女学雑誌社、明治二六年二月)。これは後に、『破蓮集』(矢島誠進堂、明治三三年一一月)に「利休居士の悟道に付て」という文章として再録された(若干字句が異なる)。

(11) 星野天知『星野天知』(『日本近代文学館資料叢書[第一期]文学者の日記4』)、日本近代文学館、平成一一年七月、八頁

(12) 前掲『明治文学全集』三二、四二五頁

(13) 小常磐主人談「『さび』と詫」『新小説』第一一年第八巻、春陽堂、明治三九年八月、一〇八〜一〇九頁。煩雑になるのでルビは極力省略した。同誌第一一年第七巻(同年七月)に載る伊藤専三「『渋味』と『さび』」という文章には、「『いき』『いなせ』が若い、水々(ママ)したものならば、『渋味』『さび』になって来ると、老耄(おいぼ)れに近くなって来ます。たっぷりあった色気が変じて、一寸垢抜けた所を見せるのにあるやうですな」(七五頁)とあるから、「渋味」や「さび」というのは、若さや色気が抜け、あるいは変じて滲み出てくるもの、と理解されているようである。

(14) 本多錦吉郎『茶道要録 茶室構造法』、弘文堂、明治二六年一〇月、五頁

(15) 前掲『茶道要録 茶室構造法』、八頁

(16) 久保田米僊『茶の湯の心得』、新橋堂、明治四〇年五月、二二頁

(17) 高橋龍雄『茶道』、大岡山書店、昭和五年一月再版、五九〜六〇頁。初版は昭和四年八月

(18) 前掲『茶道』、六八頁

(19) 高橋龍雄「名物陶器の史的研究」『国学院雑誌』第三〇巻第八号、大正一三年八月、一頁

(20) 高橋龍雄「名物陶器の史的研究(完)」『国学院雑誌』第三〇号第九号、大正一三年九月、四三頁

(21) 笹川種郎「文化史上に於ける東山時代」『史学雑誌』第二三編第九号、大正元年九月

(22) 笹川臨風「東山時代の文化概説」『歴史と地理』第二巻第四号、大鐙閣、大正七年一〇月。『歴史と地理』は、京都帝国大学国史学の学者を中心とした史学地理学同攷会が発行していた会員誌である。編集兼発行人は粟野秀穂である。発行所となっていた大鐙閣には同会の事務所があった。第二巻第四号は「東山時代」と題された特集号である。

(23) 笹川種郎『東山時代の文化』、博文館、昭和三年六月、六九、七二頁

(24) 笹川以前にも、花見朔巳の『日本文化史』第九巻安土桃山時代〈安土桃山時代〉（大鐙閣、大正一一年九月）などで茶道の重要性が説かれている。高橋龍雄はこの書を読んでいるが、さほどの影響は受けなかったようである。

(25) 牧野正巳「建築に現はれたモダーニズム」『モダン日本』第一巻第二号、文芸春秋社、昭和五年一一月、六〇～六一頁。引用文中の漢字には、すべてルビが振ってあるが、煩雑さを避けるため割愛した。

(26) 例えば、中井宗太郎「茶室建築（妙喜庵について）」（『風俗研究』第六号、芸艸堂、大正六年一月）、岡田信一郎「茶室の実用と趣味」（『中央公論』第三六年第一〇号、中央公論社、大正一〇年九月）など。それ以前の武田伍一などによる研究は、日本建築としての関心ないし研究に過ぎない。

(27) 田中王堂『象徴主義の文化へ』、博文館、大正一三年一一月。王堂は、「茶室や、俳句や、浮世絵の妙味は、妙所は、どこどこまでも色彩と形象との豊富を尊重し、保存しながら、出来るだけ単純な方便を用ゐて、出来るだけ複雑な効果を挙げようとし、挙げることに成功した結果として、其の複雑なる内容は外面的のものよりも内面的のものとなり、他の煩瑣にして粗硬な方法を以てしては到底表現することの出来ない感覚的幽玄性と官能的嘗永性とを其等の製作品に有たせたところにあるのである」としている（五〇頁）。ここには、茶室など象徴的なものを世界に誇ろうとする意識も窺え、後のモダニストたちの主張にも通じるものがある。

(28) 城戸久「さびの展望」『建築世界』第二五巻第三号、建築世界社、昭和六年三月、一七頁

(29) 拙稿「小堀遠州と『きれいさび』―美的概念用語の成立過程」『茶の湯文化学』第一一号、茶の湯文化学会、平成一七年一一月

(30) 「巻頭語」『瓶史』昭和六年四月一日陽春号、去風洞、昭和六年四月、二頁

(31) 西川一草亭『茶心花語』、実業之日本社、昭和六年三月、七、九頁

(32) 前掲『茶心花語』、二〇頁。引用部分には、すべての漢字にルビが振ってあるが、煩雑さを避けるため、重要と思われる単語についてのみルビを振った。

(33) 前掲『茶心花語』、二四頁。前注と同様、重要な部分にのみルビを振った。

(34) 田中秀隆は「茶道全集と利休・芸術・生活」（五十殿利治・河田明久編『クラシック　モダン―1930年代日本の芸術』、せりか書房、平成一六年一二月所収）という論稿の中で『茶道全集』刊行の意義について述べている。田中によると、「茶道全集では『教

養』(略)、『生活構成』(略)という形で、生活に規範を与える芸術として茶道を評価する視点が形成された」が「この主張に根拠を与える存在は、千利休であ」ったと言う。茶道全集によって「茶道」と「芸術」が「生活」、「千利休」を媒介者として結びつけられた、と主張するのである。さらに田中は、「芸術が普及することと、利休を偉大な芸術家として了解する傾向は、車の両輪をなしていた。西洋の芸術動向にシンクロナイズしていた一九三〇年代、日本的なものとみなされた茶道においても、芸術であることが求められたのである」とも言っている(一八九頁)。

(35) 大谷晃一『ある出版人の肖像—矢部良策と創元社』、創元社、昭和六三年一二月、九二頁

(36) 堀口捨己「茶をよむ」『茶道全集』別巻、創元社、昭和五二年七月、四五七〜四六一頁

(37) 松山吟松庵「さびの弁」『茶道全集』巻の一、創元社、昭和五二年七月、五八九頁。巻の一、初版は昭和一一年三月の刊行

(38) 西堀一三「佗びの胎生」『茶道全集』巻の一、六〇一頁

(39) 竹内撫石庵「佗びの心境」『茶道全集』巻の一、六三四頁

(40) 保岡勝也『増補　茶室と茶庭』(鈴木書店、昭和五年六月増補三版、二六〇〜二六二頁)に、その講演の抜萃がある。この文言は二六一頁より引用した。

(41) 樫廼舎「『わび』の弁」『和比』第一巻第一号、昭和一二年一月、巻頭言

(42) 鈴木大拙「茶と禅」『禅の講座』第六巻(『禅と文化』)、春陽堂書店、昭和一三年一〇月、一六七〜一六八頁

(43) 久松真一「日本の文化的使命と茶道」『増補　久松真一著作集』第四巻、法蔵館、平成七年五月、二一頁。昭和二七年五月二四日開催の京大心茶会創立一〇周年記念講演会における講演筆記がもとになっている。

(44) 千宗室・千玄室監修『裏千家茶道』、今日庵、平成一六年四月、三六頁

(45) 石田吉貞『隠者の文学—苦悶する美』、講談社学術文庫、平成一三年一一月、二七七頁。この書は、昭和四四年一月に塙書房から出版されたものを文庫化したものである。